

ある群像

2020年6月号

公益社団法人 好善社

東京都目黒区中町1-7-4

〒153-0065

電話：03-3712-3845

Fax：03-3791-1150

2020年5月25日

発行 三吉信彦

編集 長尾文雄



写真「聞いてくれる人がいる喜び」(2007/8/20タイ東北隣接のラオスで)。好善社がタイ国に派遣した阿部春代看護師は、1991年から29年間タイ国東北部の病院で勤務。タイ国での活動は今後も続く。(特集4～5頁)

年度はじめに寄せて

新しい年度が始まりました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、全国に緊急事態宣言が出されました。好善社の活動もストップを余儀なくされています。一日も早く事態が収束し、好善社の活動の要である訪問・交流が再開できるように願っています。

一方で、今回のコロナ騒ぎに関わらず、療養所では入所者の方々の高齢化と健康上の理由で、私どもの訪問がかなわないことが多くなってきました。

そついう中で、目と耳が不自由なある入所者の方は、知人からのお便りに対して、介護者の助けを借りて、心を込めて返信なさると伺い、心温まる思いで励まされます。私どもも、入所者に寄り添うために、さらなる思いを熱くして問安を図ってまいります。

タイでも非常事態令が出され、阿部春代社員やチャントミット社の働きが制限されています。しかし私どもはめげることなく、事態終息後の新しい展開に希望を持っていきます。チャントミット社と共に、近隣のラオスでの青少年ワークキャンプの開催を模索中です。ご期待ください。

代表理事 三吉信彦

沖縄愛楽園

昨年一二月末に、好善社三吉代表理事他二名の理事たちと沖縄愛楽園を訪問しました。沖縄愛楽園の訪問は、今回で三回目四年ぶりです。過去の訪問で出会った方々にお会いし、園内や教会のその後の状況を知りたいとの願いからの訪問でした。

愛楽園到着直後に野村謙園長を表敬訪問した際、星塚敬愛園に入所されていた時から親しくさせて頂いていた玉城清吉さんが、一二月初旬に一〇五歳で亡くなられたことを伺いました。暫く連絡が途絶えていたので、ご高齢でもあり心配していました。愛楽園のア

イドルの存在で最期まで皆さんに愛され慕われていたそうです。四年前にお訪ねした時のお元気な姿と笑顔が蘇りました。清吉さん宛てに年賀状を出していましたが間に合いませんでした。

翌日、清吉さんと同じ「祈りの家教会」の新城則子さんをお訪ね



新城則子さん(右)と筆者

し、再会を喜び合いました。残念ながら三年前にお連れ合いを天に送られましたが、息子さんの家族が訪ねてくれるそうです。家族と引き裂かれて悲しく辛かった過去のご苦勞話を、明るく語って下さったことが印象的でした。

野村園長は、ご多忙の中、私たちの訪問を快くお迎え下さいました。入所者お一人おひとりに寄り添い、その郷土愛に満ちたお人柄は、入所者や職員の方さんとの深い信頼関係で結ばれていると感じました。

自治会会長の金城雅春さんにもお会いしました。全療協非常勤中央執行委員、全療協沖縄支部長として全国各地でも活躍されています。高齢化で自治会活動も難しくなっている園もある中で、最年少の金城さんに力強さを感じました。後日、今年四月五日に放映されたNHKの番組「和解の島々ハンセン病対話の先に」で、断絶していた済井出地区の住民との対話を自ら思い立って行動を起こされた金城会長をもう一度拝見しました。

社会交流会館(資料館)と園内見学では、福祉室のご好意で他団体の見学に合流させて頂き、愛楽園交流会館研究員の鈴木陽子さんの熱意溢れる説明はとても分かり易く新鮮でした。根強いハンセン病への差別と偏見、悲惨な沖縄戦の歴史、愛楽園の礎石を築いた青木恵哉先生の宣教活動と大きな働きなどを、立体的に学ぶ貴重な時となりました。

園内には、「カトリック愛楽園教会」と「祈りの家教会」がありますが、平日のため礼拝には出席は出来ませんでした。それぞれの礼拝が、今後も少数ながらも継続されることを心から祈りしています。

一九三八年に創立以降、八〇年の苦難の歴史を経た沖縄愛楽園の今、入所者は一二六名、平均年齢八五歳と伺いました。残された入所者のみなさんの安らかな日々を祈ります。

(理事・乗圭子)

〔上の写真〕沖縄愛楽園全景。同園HPより引用〕



八月十五日を忘れてはならない

藤田三四郎

八月十四日夕方 夕菅の花が開き
夜休むことなく平和を祈り続けた

八月十五日朝起きて見ると花は散っていた

六十九年前 同期生は沖縄戦で戦死した
西の空から水を飲ませてくれと声がした
私が水を飲ませてやると
美味の音が聞こえてきた
今日は敗戦日だ

お前はなぜ生きているのかと
同期生の声があった
自分はハンセン病を宣告されて
療養所で生きている

憲法九条は世界の宝だ
六十九年間平和が続いている
(中略)

戦争で平和は守れないと同期生が言う
六十九年前に日本は火によって滅んだ
人間は火によって生かされ
火によって滅ぶ

藤田三四郎著『夕菅の祈り』21〜23頁



藤田三四郎さん
関西の講演会で
(2008年6月)



文芸作品、活動記録等
18冊の書籍を出版

藤田三四郎(ふじたさんしろう)

一九二六年、茨城県に生まれる。一四歳で志願して少年飛行兵として陸軍に入隊。終戦直前の一九四五年にハンセン病を発病、栗生楽泉園に入所。園名を夏目漱石の書名から「三四郎」とした。一九四六年、石井ふさと結婚。一九六〇年から園の自治会執行委員、以後終生五〇年近く自治会長を務めた。らい予防法「廃止以降、人間回復のために全国各地で語り部として啓発活動。文才に長け、詩文集『方舟の糧』など一八冊の作品を出版。二〇〇一年、茨城新聞詩壇の部「後期賞」、翌年に群馬県「県功労賞」を受賞。園内でキリスト教に出会い、聖慰主教会の信徒となる。戦争体験から「憲法九条を守る会」に入会して活動。多くの人びとの交流があり「出会う人はみな恩師」「私の孫は千人」と語り、信望が厚かった。二〇一九年一月、園内に「人權の碑」を建立、隔離の歴史と教訓を伝える。座右の銘は「一生青春、一生勉強」。二〇二〇年三月一五日、老衰で死去。九四歳。

藤田さんのご生涯を三つの言葉で表現したい。一つは「闘う人」。園の自治会長、語り部としての人間回復の啓発活動、平和憲法九条を守る闘いを続けた。二つ目は「祈る人」。園内に流れる聖歌を聴いてキリスト教会へ。「外なる人は破れても、内なる人は日々新たななり」の信仰を全うした。三つ目は「表現する人」。詩、川柳、随筆、活動記録など多数の書籍を出版。上記の詩は、同期生を沖縄戦で失った悲しみと平和を願う決意が表れている。一九四五年は、藤田さんの「敗戦と入所」の年である。「死は恐くない。天国に行くのだから」が最期の言葉。輝ける九四年の人生だった。

ハンセン病にかかわって45年

看護師として国内とタイ国の施設で

好善社社員 阿部春代さんに聞く



好善社が派遣看護師として、阿部春代社員をタイのシリントン病院に派遣していましたが、昨年9月で29年間の勤務が終了しました。タイでの活動は今後も続きますが、これを機に45年にわたる阿部社員のハンセン病とのかわりについて聞きました。(写真=タイ国に隣接のラオスで。2007年)

ハンセン病との出会いと好善社

忘れもしません。45年前の1975年春分の日、岩手県・内丸教会の牧師の誘いで、国立療養所松丘保養園を訪問。私の故郷の青森にハンセン療養所があることを、看護学生でありながら知らなかったことにハッとしました。療養所の教会では、入所者があふれる笑顔で賛美する姿を目の当たりにし、後遺症を意識させない生き生きとした姿に驚きました。この時のハンセン病との出会いが、私の出発点です。

75年8月、松丘保養園での好善社のワークキャンプ、続いて77年8月に宮古南静園でのワークキャンプに参加しました。また、同年11月の好善社100周年記念会で、南静園に介護助手と

して派遣されていた天羽道子さんと出会い、お話が心に残りました。これらのお会いが、私と好善社の深く長い関わりに導かれることとなり、81年8月に好善社に入社しました。

療養所の看護師として活動

その当時、沖縄のハンセン病事情が本土から30年遅れていると聞き、「宮古島で看護師として働きたい」と考え、南静園を訪ねて看護師募集状況を聞くと、地元出身が多いと知り就職を断念しかけた時、「本当に宮古島へ行く気があるのか」と藤原偉作理事長から問われ「私でよければ」と即答、78年7月に好善社派遣看護師として宮古島へ行くことになりました。

南静園に赴任直後、一人のおじいさんが新聞紙を広げて曲がった手に安全カミソリを握りしめ、自分の足の裏を血を流しながら削っている光景を見たことが今も忘れられません。患者さんたちは、自分の足の傷を手当てする方法を熟知し「この傷は死ぬまで治らない」が口癖でした。私の宮古南静園派遣は81年1月まで続きました。

81年2月、私は「南静園から出発する」と決断して宮古島を後にし、2週間後に岡山県瀬戸内の離島、長島にある国立療養所邑久光明園の看護師として勤務、90年6月まで続けました。

タイの病院へ派遣されて

私は、この時期にタイ国を訪問し、ハンセン病の現状は年間3千人もの新規患者がいること、しかし日本のような隔離ではなく、患者が家族と共に暮らし、貧しい中で懸命に生きている姿にひきつけられたのです。「ハンセン病の後遺症を抱えた人たちの保護と予防に関わることが出来れば嬉しいな」との思いが膨らみました。そして、90年7月より好善社から派遣され、タイ国東北部療養所の現・シリントン病院に勤務しました。

ハンセン病は完治したけれど、ハンセン病の後遺症で手足に知覚麻痺がある人たちは、一生この手足の保護と予防が必要です。本人が日常的な手当てをすれば傷を防ぎ、変形も最小限にできます。私は、その人たちの手足を実際に洗い、一回だけの手当てでもその手足がどう変化するか、自分の目で見

阿部春代さんの活動年譜	
年月日	事項
1975年3月21日	初めて国立療養所松丘保養園を訪問
1975年8月	好善社ワークキャンプ(松丘保養園)に参加
1977年8月	好善社ワークキャンプ(宮古南静園)に参加
1977年11月	好善社100周年記念会に出席、宮古南静園に看護助手として派遣の天羽道子さんに出会う
1978年7月～81年1月	好善社派遣看護師として宮古南静園へ
1981年2月～90年6月	邑久光明園の看護師として勤務
1981年8月	好善社に入社、社員となる
1982年4月	好善社のタイ国ハンセン病施設訪問
1990年7月	好善社派遣看護師としてタイ国へ渡る
1991年7月	タイ国立ハンセン病療養所ノンソムブーン(現シリントン病院)に赴任
2009年3月	看護学雑誌『インターナショナルナーシングレビュー』(Spring 2009)に「国際看護の現場で行われるケアの特色」が掲載
2010年～2019年	日本の看護学校で「国際看護の実際」講義
2011年～2019年	日本の看護学生のシリントン病院実習に協力
2011年3月	読売新聞社第39回「医療功労賞」を受賞
2011年11月	社会貢献支援財団「社会貢献者賞」を受賞
2019年9月	コンケン県立シリントン病院での勤務終了

て肌で感じてもらい、傷が良くなることを知らせ、「治りたい」と思っただけと願って、セルフケアへの促しを勧める支援をしてきました。

その後、29年を経て分かったことは、当事者が自分の手足の傷に関心を持って取り組むと、状態は良い方へ向かう。そして、局所の傷だけでなくその人の生活を含めた見方の中で、生きる力に働きかける大切さに気づかされたことです。私はこの間、看護師として関わり、「人間の生きる力は、想像を超えて限らないものである」ということを教えられるました。今は、感謝の思いで一杯です。



第14回タイ国青少年ワークキャンプで。(2018年)

ワークキャンプにかかわって

タイ国の姉妹団体チャンタミット社と好善社の相互理解のためのワークキャンプがタイで4回実施され、その後タイ国青少年ワークキャンプが15回あり、現地滞在の私はワークキャンプ前後の連絡・調整に携わってきました。キャンプ期間中はキャンパーの一人として私なりに労働をし、「今回もできた」と感じています。昨年、私の目に焼き付いたのは、若者が新しい一歩へ踏み出そうとする輝かしい光景です。

タイ国派遣29年を終えて

昨年9月、シリントン病院での29年間の勤務が終わり、「もう連日患者さんを訪ねる場がなくなった」と実感しています。今後は、チャンタミット社との関わりの中で、高齢者活動の協力、回復者の知人が住む村を訪問すること、回復者の子供を訪問すること、シリントン病院の障がいと後遺症を抱えた人々、日本の療養所の入所者を訪ねること。また、私が知り得たハンセン病に関わる人々の状況を語り繋いでいきたいと思っています。

最近の新型コロナウイルス禍の中で、感染者や家族を非難する風潮があります。かつてハンセン病の患者さんやその家族が、どれだけ苦しい思いをさせられ続けてきたかを改めて感じます。私自身も「おかしい」との思いを放置せず、自戒して過ごす日々でありたいと深く心に刻んでいます。

(聞き手〓社員・長尾文雄)

キャンパーたちのその後 多磨全生園秋津教会 オルガニストとして

横田和子

大学生の頃の一九六七年、藤原偉作理事長、チャプレンの小澤貞雄先生のもとで行われた松丘保養園でのワークキャンプに参加しました。その二年後からもう五〇年以上になりましたが毎月一回、多磨全生園の秋津教会礼拝の演奏をさせていただいています。

鈴木正久先生をはじめ多くの牧師先生に出会い、先生方がそれぞれの接方で全生園の皆さんに寄り添い語りかけて下さるのを傍で見えてきました。それは私にとって幸運なことで、大切な



秋津教会のクリスマス礼拝で演奏(2017・12・24)

宝物となっています。

最初は小さな足踏みのオルガン（懐かしい！）でしたが、後にいろいろ操作できる立派な電子オルガンを備えてくださいました。毎回礼拝で弾く前奏曲など、その時に相応しい曲を選ぶようにしています。

礼拝後、会員さん手作りのキュウリの漬物（夏にはスイカも：）を皆でいただきながら、昔の思い出やつながっている多くの方々の消息などを語り合うお茶会も楽しいひとときです。

聖歌隊と大きな声で

もう一人の奏楽者、森田陽子さんと共に聖歌隊のご奉仕もしています。淋しいことに会員数がだんだん減り、少人数ですが頑張っています（六、八人くらい）。クリスマス前夜祭のための録音は、お手伝いして下さる方が増え、信じられないことに年々素晴らしいハーモニーを作り上げているのです。年に一度、何とか失敗なく良い録音をと、皆が緊張して臨む日です。テナリの鹿内芳仁さんも毎年駆けつけて下さっています。

イースターやクリスマスのために普段も礼拝後、少しの時間ですが練習し準備しています。讃美歌を歌う皆さんとても真剣ですし、信仰心や内に秘められたものを歌いたいという気持ち溢れているのを感じます。賛美することの原点を教えられるのです。

そして、好善社の支え、かかわって下さっている方々の励ましが、聖歌隊の皆さん、そして私にも大きな力と

清瀬駅前の西武バス停で 2019年7月7日(土)午後4時頃

ひとりの高齢の女性に話しかけられた。「バスは出たところやね」「そうですね。待ちましょう。ハンセン病資料館まで行きます」「わしらよう知らんけど、昔は結核で死によった。らいは分からん。遺伝するんやね」「ちがいますよ。遺伝しません」「でも、らいの人見たことないね」「そうなんです。みんな強制隔離されたんです」「へー、そうですか」。バスがハンセン病資料館に着いたのでお別れ。高齢夫人「ええ話聞かせてもらって有り難う。脚、気づけてね、さよなら」。杖をついている私の背後に聞こえた。毎月一回、多磨全生園の秋津教会に大阪から通う。お馴染の清瀬駅南口バス停での一こま。(川崎正明)



なっています。これからも出来る限り皆さんと共に大きな声で歌い、オルガンを奏でていきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

好善社短信

◆ブックレット発行(昨年)の講演会
20号「療養所の現場と向き合って」(ソシヤルワーカーの願い)坂手悦子さん(邑久光明園ソシヤルワーカー)
21号「ハンセン病家族訴訟が問いかけるもの」徳田靖之さん(家族訴訟弁護団共同代表)

◆好善社社員の療養所訪問

二〇一九年度は、全国一〇カ所の療養所を述べ二二六回訪問しました。また、社員の三人の牧師が二つの療養所教会の礼拝説教の応援をしています。

◆講演会(関東・関西)は延期

二〇二〇年度六月開催予定の「ハンセン病を正しく理解する講演会」は、新型コロナウイルスの影響で今年には中止となり、来年度に延期となりました。

◆チャンタミット社サクチャイ理事逝去

昨年一月九日急逝(41歳)。青少年ワークキャンプの総リーダーを長く務められました。次代の指導者と目されており、社のみならず好善社としても悔やまれません。冥福を祈ります。

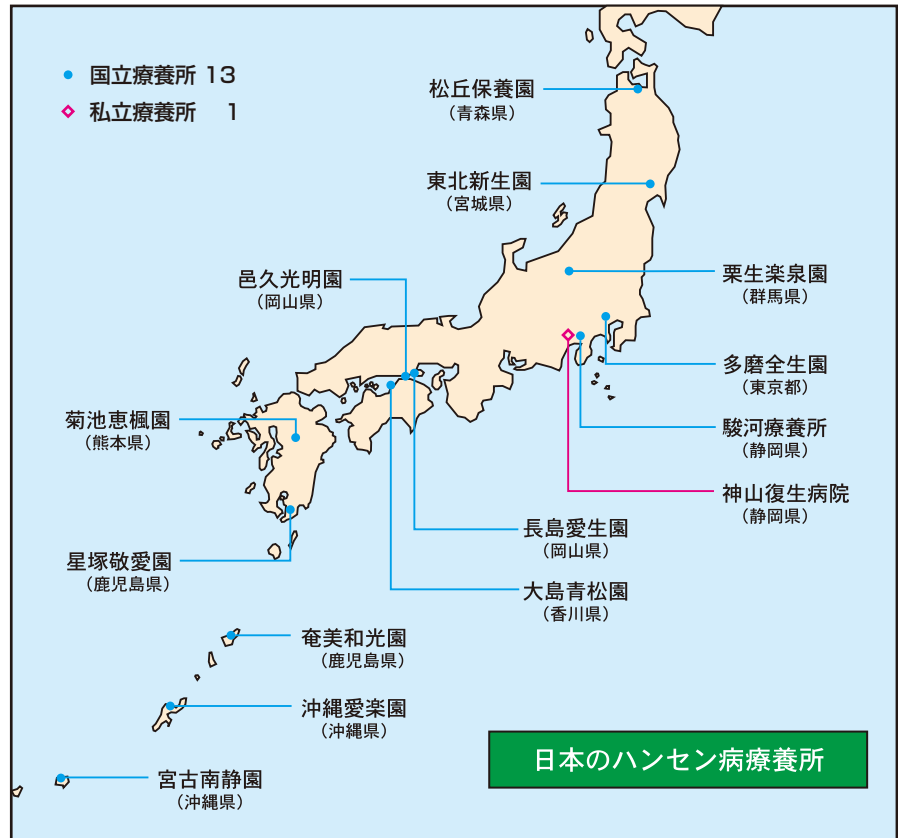
日本の入所者を中心とした基金 「タイ国ハンセン病施設教育基金」

2019年度 献金額	353,963円
送金額	420,546円
2018年度末 基金現在高	972,005円
2002年～2020年3月末 基金献金総額	20,040,987円
2003年度～2019年度 基金送金総額	19,560,085円
(延べ奨学生数808名)	

●同基金は2002年に創設され、当初はタイ国のハンセン病コロニーで生活する子どもたちと働き手の教育・研修を支援するために当てられましたが、現在は高等教育該当者のために用いられています。
●同基金への寄付はいつでも受け付けています。

国立療養所 入所者数 2019年12月末日現在

	男	女	計
松丘保養園	22	37	59
東北新生園	21	34	55
栗生楽泉園	28	27	55
多磨全生園	68	81	147
駿河療養所	25	23	48
長島愛生園	79	66	145
邑久光明園	34	47	81
大島青松園	27	24	51
菊池恵楓園	71	105	176
星塚敬愛園	50	61	111
奄美和光園	7	13	20
沖縄愛楽園	59	68	127
宮古南静園	28	26	54
19年12月計	517	612	1129
18年12月計	577	668	1245
前回比	-60	-56	-116



2020/2<好善社調べ

6月・夏期募金のお願い

国内とタイ国のハンセン病に関わる好善社を支えてください！

2020年度募金（会費・寄付）目標額 1,000万円

ハンセン病問題の今

日本国内ハンセン病療養所は、2019年12月末日現在の入所者数1,129名、平均年齢86歳となりました。急速な高齢化の終焉期を迎えています。

ハンセン病問題は、「らい予防法」廃止、「国家賠償請求訴訟」原告勝訴、「ハンセン病問題基本法」成立、そして昨年「ハンセン病家族訴訟」原告勝訴による「ハンセン病家族補償法」が成立しました。しかしなお、社会に残る偏見・差別の解消には至っていません。

好善社は次のような活動を行っています。

国内ハンセン病啓発・支援事業

- ◆全国13カ所の療養所訪問・交流活動を続ける。
- ◆講演会・出版・啓発活動 偏見差別解消のために。
- ◆回復者・入所者のいのちの尊厳が保障され、その人たちの名誉回復、ハンセン病問題の最終的な解決の実現を願っての支援と啓発活動を続ける。

2020年度収支予算(抜粋・単位円)

療養所訪問・広報宣伝費	4,430,000
タイ国支援事業・チャンタミット社支援	1,500,000
・看護師派遣	2,400,000
・現地調査・交流費	3,500,000
事業運営費	7,890,000
収入 会費	3,300,000
寄付	7,900,000
雑収入 ほか	10,000

タイ国ハンセン病支援事業

阿部春代社員（看護師）のシリントン病院での活動は昨年9月で終わりましたが、好善社のタイ国での事業支援は継続し、阿部社員の活動も続きます。そのために、

今年度740万円の活動費が必要です。



後遺症治療に当たる阿部看護師

1991年から29年間、阿部看護師はタイ国東北部の病院に勤務し、ハンセン病による後遺症を抱えた人びとのセルフケアへの促しと寝たきり高齢者の介護・看護に当たってきました。

タイ国のハンセン病に関わって

1980年代以降、好善社はタイ国のハンセン病支援団体チャンタミット社の運営を側面から支援し、人的交流を続けています。ハンセン病を病んだ人の子どもたちへの奨学金活動にも関わり、この奨学生を対象としたタイ国青少年ワークキャンプが昨年15回を迎えました。

2020年5月25日

公益社団法人 好善社 代表理事 三吉信彦
理事 棟居 勇 朝倉秀之 川崎正明
加藤裕司 阿部春代 乗 圭子
本行輝雄